詩集　忍耐づよい鳥
© 1975 H. NOMA

一九七五年四月十日発行

著　者――野間　宏
装　画――麻生三郎
発行者――中島隆之
発行所――株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六　郵便番号一〇一
電話東京二九二一・三七一一　振替東京一〇八〇二
印刷――中央精版印刷　製本――岸田製本

定価は函・帯に明示してあります

忍耐づよい鳥

野間 宏

河出書房新社

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

忍耐づよい鳥
忍耐づよい鳥 10
栄光の霞 14
漂流する君 18
瞬間の鍍金 22
欠如の顔 26
花瓣の夜 30

葬い鳥　32
内耳の放火者　36
満月　40
天と地　44
目覚め　48
とげの騒ぎ　52

詩集

忍耐づよい鳥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

忍耐づよい鳥

夢がなお、ほんの僅かばかり、真実のように眼のふちについている、
長い飛翔にあざむかれた忍耐づよい鳥が、
破れた翅をやしなう脂(あぶら)をすべり込ませるのも捨てている、
咽喉元に押しあげてくるのは、青い魂の痙攣などではない、
決して天へと昇ることなく、口笛と昇りつづけ、なかですぐにも
行方不明になる渇き。

渇きはそこだけがやさしく流れている首筋の彎曲を透して薄闇のなかに光を放つ。
忍耐づよい鳥は、あつめたすべての生き物の黄金の記憶を
いまは種のためなどではない、ただ忘却のための巣のなかに卵のようにならべ、
鋭い薄刃をそなえた自慢の爪は用心深く内にまげ、
効果のない、血の薄い体温を、いたずらにおおいかぶせる。

やがて時間の病をのせる救急車が迎えに来ることだろう。
しかし仕方もなく、ただ、何個かの吐き出された沈黙の塊りだけを見つけて、
　運ぶほかはないだろう。
瞳を開ききったまま、見ることをやめた鳥は
その茶色の眼の繊維組織を寒い偽りのようにきらめかせ
なお誇りを捨てえぬ愚かな嘴を空に向けて突きだし侮蔑の舌を横っちょにのぞかせる。

そして忍耐強い鳥は軽便鉄道のような身をじっと動かすことがない。
自由が水銀柱のように目盛りのある管を通る、
巣のまわりに運び込んだ、涙にかわって輝くことを知らぬ宝石類のすぐそばで、
特売の「永遠」のなかにとじこめられた、
木枝に刺した冷凍魚の眼が、薄赤く泣きつづける。

栄光の霞

見くびりきった、かたくな者の跛行(はこう)の冬との、
お寒い同棲の計算書がはやばやと送りつけられ、雪のように眼を焼き、
病院通いの鞭打ち症の細身の春をあわてさせる。
長い首筋の残雪の白布の端は、緑の無為の襟元の粧いこらして隠しおおせたが、
陽炎の透明な呼吸の合間からもれる、厚氷(あつごおり)のなかに凍結された肉の放つ哀れな
声を防ぐすべもない。

とぎすまされた時の速度の勝鬨が、頭と体軀の間の橋げたはずされた橋梁の上を渡る、
季節の優しい添寝の希いすげなく破られ、素肌をさらした鳥たちが、人工の突風の
なかで羞恥を舞っている、
手入れのたりない髪のむなしい騒ぎをなげき、春は床の上に身をおこして、
数多の裏切りの接吻を紅で塗りこめ、唇の花弁の黄色の虚言の雌しべに
あつい息をおくり、
葉を落して、空を網にあむ枝々に、平衡を奪いとられたまま残されている
耳の果実の、薄紫の奸策の胚芽をあたためる。

灰色の雲の眩暈の走る白内障の眼は、悲しく癒え、
解けはじめた氷柱の枠の青い大鏡の奥へと、
告別の死化粧をほどこした泥酔の蝶たちを導き入れ、
苦しげに顎をつきだし、吐きつづける汗に濡れた昼の月とともに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook